

お墓から始まる新しい人生

私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、…。 第一コリント15章3,4節

——— 人は生きてきたように死んでいく ———

金城学院大学の学長であった柏木哲夫先生は、その著書「安らかな死を支える」の中で次のように言われました。「私は、今まで臨床医として400人近い人々の死に、直接、間接にかかわりを持って来ました。中には本当に平安な死を迎える人があるかと思うと、苦しみ、悩みながら死を迎える人もありました。その有様は人それぞれ、実に様々です。

しかし多くの人々の死を看取(みと)ってきて、最も印象に残り、また教えられたことは、『人は生きてきたように死んでいく』ということです。しっかりと生きてきた人は、しっかりと死んでいきます。人に感謝しつつ生きてきた人は、人に感謝しつつ死んでいきます。人をいたわって生きてきた人は、残される者をいたわりながら死んでいきます。

一方、周りに依存して生きてきた人は、医者や看護師に、そして家族に依存しながら死んでいきます。すべて、その人の生きざまが、死にざまに反映するというのが、患者さんから教えられた一番大きなことでした。

『良き死を迎えるためには、良き生を生きなければならない』

これは、私自身が、これまでのホスピスの働きを通して学んだ最大のメッセージであるとともに、私の人生に対するチャレンジでもありました。

さて今日は、皆さまがいつか素晴らしいお葬式をする、そのためにも、今素晴らしい人生を歩まなければならないのですが、そんな応援メッセージになればいいなあと願いつつ、この説教を準備させていただきました。

ある方がこんな質問をしました。「福音の中で最も大切なものは？」 誰もが次の2つを答えるでしょう。それは「キリストの十字架」そして「キリストの復活」

1、キリストの十字架による罪の贖い。

2、キリストの復活による新生。

では、「3番目は何でしょうか？」と言われたらどう答えますか？「天国の祝福、再臨の希望、聖霊の満たし、きよめ、いやし…。」

「それは、お葬式です。」と言ったら、皆様は「意外！」と思われるかも知れませんね。

でも、第一コリント15章3,4節です。「キリストは…罪のために死なれた。 (十字架)

キリストは葬られた。 (葬り)

キリストは…三日目によみがえられた…。」(復活)

キリストが葬られたことは、四つの福音書にしっかりと書かれています。実は十字架と復活の間に「葬り」があるのです。キリストは十字架からではなく、墓からよみがえられたのです。

----- 葬儀の持つ意味 -----

人はなぜ葬儀(葬りの儀式)をするのでしょうか？ 5つのポイントで学びましょう。

1、故人への礼儀です。

故人を手厚く葬り、その一生をしのび、懐かしみ、感謝の念をもつためです。

2、共に悲しむためです。

愛する者の死は耐え難い悲しみをもたらしますが、悲しみを分かち合うことで、痛みを和げ、

慰めといやしがもたらされます。

3、最後の別れをするためです。

人生は出会いと別れの連続ですが、葬儀は故人との、この世において最後の別れです。

4、死を確認するためです。

人生にけじめをつけるためかも知れません。

一人の婦人は、夫が亡くなった後も、夕方の6時半になると、よくガレージを開けて夫の帰宅を待っていました。「今日はどうして遅いのだろう」としばらく、つぶやいて、やがて「はっ」と、夫は亡くなったのだと気づくのです。それは、夫がお骨になって、お墓に埋葬された、納骨式の光景を思い出すからです。もし葬儀がなかったら、納骨式がなかったら、彼女はいつまでもいつまでも、夫が生きていると錯覚し続けることでしょう。

また別の婦人は、赤ちゃんが死産でした。彼女はその赤ちゃんを胸に抱いたままお乳をあげようとします。離すことをしません。「この子は生きている」というのです。夫や、両親が来て離そうとしますがそうはさせません。繰り返し、繰り返し説得してやっと離させました。その後、火葬(凱旋式)をして、そのお骨を見て、やっとわが子が死んだ事を、この世にはいないんだと言う事を悟りました。

5、新しい人生に入るためです。

愛する者が死んだ後も、残された者たちの人生は続きます。葬儀により死を確認すると、新しい希望に向かって歩み出せるようになります。この様に葬儀は未来に向けた肯定的な儀式なのです。

作曲家の古賀政男さんは、その人生の中でたくさんの絶望や悲しみを経験された方です。ある方から質問されました。「悲しい時はどうすればいいのですか?」「悲しい時は思い切り泣きなさい。涙が枯れるまで泣くんだよ。」「涙が枯れたらどうするのですか?」「しゃがむんだよ。そしてね、立ち上がるんだよね。」

今、故人は、もうすでに立ち上がっている皆さんの背中を「ポン!」と押して、きっとこんな言葉を伝えようとされているかも知れませんね。 「さあ、一步、踏みだしてください!」

——— 今、生きている私たちのお葬式 ———

さて私たちは今、この世界に生きていますが、生きている私たちもお葬式をしなければなりません。私たちのお葬式について学びましょう。

———— バプテスマはお葬式 —————

ローマ6章3,4節「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたものではありませんか。私たちはキリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストと共に葬られたのです。それは・・・私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」

人はイエス様を信ずることによって、生まれ変わります。新生するのです。ということは過去の私は死んで、新しい私に変わるのです。バプテスマはまさに、そのことを教えてくれます。人が死んでお葬式があるように、バプテスマは肉なる古き人のお葬式です。

特に、私たちの教会は原則として浸礼です。水に沈む時、その人は死んで新しい生命に生きる者となりました。洗礼(浸礼)には特にその様な意味が込められています。

----- バプテスマは「水葬」 -----

ある方が、バプテスマのことを「水葬だ」と言いました。

「土葬」においては、地中に埋められ、

「火葬」においては、炎によって骨と灰になり、

「水葬」においては、水中に沈められます。

この様に、死はもはや疑うことのない決定的な事実となります。キリストの体が葬られた時、最終的に死が確認されたように、皆様がバプテスマを受けた時、皆さんの中の肉の古き人の死も、公に確認されたのです。

ある先生がイスラエルの園の墓を訪れ、そこからされこうべの形をした丘を見上げた時、こんなささやきがあったそうです。「お前は、あの場所で、キリストと共に十字架につけられたのだ」と。それから園の墓の中に入っていくと、また同じ声で「お前は、この墓に、キリストと共に葬られたのだ」と語りかけられたそうです。

私たちはバプテスマという私のお葬式をきちんとして、過去の肉の私と決別しなければならないのです。そういう意味で、バプテスマはキリストを信じて生まれ変わっているならば、絶対にしなければならないのです。

----- 葬式のない危険な生活 -----

エジプトで奴隷生活をしていたイスラエルの民は、指導者モーセのリーダーシップにより、紅海を渡ってエジプトの圧制から解放されます。彼らが目指すのは乳と蜜の流れる約束の地のはずでした。

でも2人(カレブ、ヨシュア)を除いては、全員が約束の地に入れず、荒野でしかばねをさらす羽目になりました。なぜでしょうか？ 実は、彼らはエジプトの生活を懐かしみエジプトのネギやニンニクを忘れることができませんでした。体は約束の地に向かっていても、心はエジプトに向いていたのです。紅海を渡ることは、エジプトの生活を葬るお葬式だったはずなのに、彼らの心はエジプトを葬ってはいませんでした。エジプトを引きずりながら約束の地に向かっていたことが、彼らの命取りになったのです。

皆さんの中には、礼拝に来るときに、心をこの世に残して来ている人はいませんか。

あなたは、あなたの古き人を葬っていますか？ 古き人のお葬式をしていますか？

私の受洗日は1968年9月22日(52年前)です。この日は過去の肉なる私が死んで、主の墓に葬られた日です。そこから私の新しい人生がスタートしたといっても良いでしょう。

聖書の言葉「私はキリストと共に、十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」ガラテヤ2章19、20節